

フェストゥスの前でのパウロの弁明

総督フェリクスのユダヤ人懐柔政策の犠牲となって、使徒パウロはカイサリアのヘロデ宮殿の拘置所に未決のまま2年も幽閉されてしまった。2年が過ぎたとき、フェリクスは執政官としての失敗の故にユダヤ人によって皇帝に訴えられ、総督の地位を失いローマに召喚された。その後任としてフェストゥスがローマのユダヤ総督として任命され、カイサリアにやって来た。彼はローマの有力な官吏らしく着任そうそう精力的に働いた。新任総督の到着に使徒パウロは問題の早期解決を期待したと思われる。

しかし、その期待は裏切られた。パウロに対する裁判がフェストゥスの法廷で開かれたとき、パウロの理路整然とした真摯な弁明によって、フェストゥスは事の本質が何であるかをよく理解した。すなわち、ユダヤ教当局者によるパウロ告発の問題の核心は、騒乱罪という政治上の問題ではなく、ユダヤ人の信仰問題であり、ローマ政府が介入すべきものではないこと、従ってローマ法からすればパウロは何ら罪にあたいしないことを知っていた。

しかし、それにも関わらず、彼もまた、前任者フェリクスと同じく、「ユダヤ人に気に入られようとして」パウロを釈放しないばかりか、エルサレムにおいてパウロの裁判を行おうとさえ提案したのである（9節）。

またしても、この世の政治家の無定見で、見え透いた保身的なやり方に直面し、パウロはもう我慢することができなかった。過去2年間、無罪であったにも関わらず、フェリクスのユダヤ人懐柔策の犠牲となって、不当にも未決のまま幽閉されてしまった。そして、今また、フェストゥスのユダヤ人の機嫌を取ろうするいい加減な態度によって、今度はエルサレムに連れ戻されようとしている。これでは到底、公正な裁判を受けることができないばかりか、いつまで幽閉されるか分からない。取るべき道はただ一つ、ローマ皇帝に上訴する以外にない——こうして使徒パウロはやむなくローマにある皇帝の法廷に上訴することを決心した。

使徒言行録の著者ルカは、カイサリアでの幽閉の2年間について詳しい記録は残していない。パウロにとってこの2年間はどのような意味があったであろうか。彼は、不幸とも見えるこの期間をどのように過ごしたのであろうか。やはり無意味な2年であったのだろうか。自分の境遇を悲しみ、日々、あせりの中で、嘆息しながら時を過ごし、暗いじめじめした2年間であったのだろうか。決してそうではなかった。

24章23節が暗示しているように、彼のところにはひっきりなしに訪問客がやって来た。その中には彼の弟子たちが、カイサリアの教会の信徒たちが、或いはまた異邦人教会から彼の助言を求めて来る人々がいたであろう。後で見るとそれはローマの獄中でも起ったことであった（28：23参照）。牢獄が彼のオフィスと伝道の場所となった。

それに、フェリクスおよび妻ドルシラとの度重なる面会があった。それは彼らに福音を語る絶好の機会となった（24：26）。さらにまた、彼の世話をする総督府の官吏たち、兵士たちにも福音を証しする機会になった。このように、彼の身は鎖につながれていたが、福音はつながれてはいなかった。福音の宣教という神のみ業は、こうして人間の思いをはるかに超えて進んでいった。彼はやがてローマの権力に守られて、世界の都ローマへと導かれて行くのである（使徒27～28章参照）。